

## 洋行日誌 卷二

洋行日誌 第十一報 自二十三年六月二十三日

至 同 七月 五日

### (●第九十三日目)

六月二十三日 月曜日 雨天

六時起床。七時から十二時まで授業。十二時から三十分間程校長の談話があった。これは近日、二三の学生に風儀悪い風聞があったことによるもので、こうあつては遠来の学生〔私〕等に対しても恥ずかしい、云々というもので、五人の学生が少々罰を頂戴したものである。

午後から第十報の手紙を認める。夕食後炭焼の方へ散歩する。

この節の天気は曇りがちで、雨が時々降るようである。しかし長くは降らず直ぐに止むので、その合間に散歩をするようにしている。

十一時半就寝。

### (●第九十四日目)

六月二十四日 火曜日 快晴

六時四十分起床。第十報を投函し、帰途植物学の書籍一部を購入する。古本は非常に安い、新説新刊の本はなかなか高く十五マルクした。八時から十二時まで授業。昼食後ヒルトネル、ホツタ両氏と前山を散歩する。今日のドレスデン新聞には、本年四月中のドイツ全国の鉄と銅の生産量は四十万二千三十四トン〔一トンは二百七十貫〕とあり、鉄業が盛んなことを知ることができる。また同一カ月間、全国内の諸税〔例えば煙草、砂糖、塩税等〕は五千九百七十七万一千一百七十五マルクとある。商売もまた盛大というべきである。

夕食後、ヒルトネル氏の部屋へ行き植物の話をする。大いに参考になった。十時半就寝。

### (●第九十五日目)

六月二十五日 水曜日 快晴

六時起床。七時から十二時まで授業。昼食後、ヒルトネル氏と植物を集めに散歩する。十一時就寝。

### (●第九十六日目)

六月二十六日 木曜日 快晴

六時二十分起床。七時から十二時まで授業。午後四時から七時まで植物の実地教授があった。教授のツベ氏〔ザクセン国枢密顧問官〕と植物園へ行つたところ、近來希な好天気、空は青く山緑に鳥は梢に囀り、蝶は花に眠っていた。この学校の植物園は夕七時まで公開しており、自由に庶民の散歩を許している、男女で園に遊ぶものが大変多い。三時間立ち続けたので大いに疲れ、夕食後九時に直ちに寝に就く。

この国のドレスデン新聞に、日本の大臣の小更迭、陸奥氏の農商務大臣になつたことが記されていた。

### (●第九十七日目)

六月二十七日 金曜日 快晴、午後雨あり

六時半起床。七時から十二時まで授業。今日のケムニツク新聞に、日本赤十字社の記事が出ていた。夕食後押し葉を見る。十一時就寝。

この日近所の花屋で薔薇の花を買ひ求め、花鉢に置く。大変美しく、目を楽ませてくれる。しかも香りが大変良い。この時期は薔薇の花盛りで、ようやく暖かな気候となつてきた。これからはこの地の繁盛する時節である。天気の良い日には、ドレスデン辺りから散歩に来る人々が日々多くなつてくる。近頃は前を流れる川の水かさもやや増して、石に激しく流れる有様は大変面白い。

(●第九十八日目)

六月二十八日 土曜日 快晴

六時起床。七時から校長はじめ一同と実地演習に出掛ける。山の麓の森を通って行くこと十数町、一つの伐木場に着く。ここで人夫に種々の機械を使わせ、木を根こそぎ倒すこと、または伐採すること、または火薬を使って木を割るなどの方法を行わせた。この後種々の講義を聞き、午後一時に帰る。この日は天気も良く、実によい運動となった。

帰りの途中、プロヘッソルドクトルのイマイステル氏〔学校で三番目の教授〕は、私に向かつて「あなたは煙草も吸わず、ビールもあまり飲まないということだが、実に良いことで感心である、云々」といわれた。小さい町なので、何事も一挙一動よく知れ渡るため、かえって勉強に張り合いがある。夕食後シミット氏と散歩し、十時に就寝。

(●第九十九日目)

六月二十九日 日曜日 曇天

八時起床。午前中ヒルトネル氏の部屋へ行き、既に出来上がった押し葉を分ける。カシワの種類だけでも三十種類は集まった。ドイツには実にかシワの種類が多い。午後からヒルトネル氏、シミット氏他二名と三四里もある森の中を通じて、西方に散歩し種々の花等を集め、□□□□トルフ(□は欠字)という所で、コーヒーと菓子を食べた。それからまた菓子を持って、二時間程山を通ってエーデルクローネーという村に出てビールを飲み、十時に帰る。

この日は快晴とまではいかないまでも、雨が降らなかつたので散歩には適していた。しかも日曜で多くの人々が山道のほうへ散歩に出掛けたので、村の茶屋(むしろビール屋)は皆賑やかで、踏舞などがあちこちであった。帰宅後、大いにくたびれていたもので、直ちに寝に就いた。山道は景色も良く、空気が新鮮で、殊にこの国は道路の清掃に注意を払っているので、散歩には最も都合の良いところである。

先に日誌中、香港の記に猿猴杉の大きいもの云々と申し上げたが、私の

日誌は一にわが両親はじめ親、親族姉妹等の心を安心させるため、また心を楽しませるのを主としいる。従って樹木の名称など、専ら何人にも分かつて想像するに便利なものを用い、敢えて学術上の区別、名称等を用いなかつたが、今もし新聞紙に掲載されるならば、私の意を知らないものは、森林学者でありながら、木の名前も知らないのか言われるのも悔しいので、知っているままに申し上げる。

右の猿猴杉というのは、松柏科には違いないが、杉の子分ではなく、また樅族でもない。難しく言えば□□□□□□(□は欠字)である。ただ遠くで見れば樅のようで、近くで見ると葉の模様が日本の猿猴杉に似ているのでそう言うのであって、日本の猿猴杉とも異なっている。しかしこれは改めて言うまでもなく、植物学者になれば植物地理学上で知るはずである。

(●第一百日目)

六月三十日 月曜日 快晴

校長がこの日山林会議に出席することになっており、朝の時間は休みとなつていたので七時まで寝ていた。八時から十二時まで授業。

夕食後ヒルトネル氏と近郊を散歩する。本日の日の出は三時四十二分、日没は八時二十四分と随分と日が長くなっている。しかし夜は直ぐに十時になるため夜間は勉強をする暇がない。日記でも記す程度である。

ドイツは煙草屋とビール屋が非常に多く、至る所にこの商店のないところはない。そのため私はドクトルに言った。ドイツの富のその幾部分かは煙り(煙草)となつて散り、また水となつて流れ去るだろう(ビール小便)と。しかし私はそれが偶然ではないことを知ると、両ドクトルが言った。東洋の諺にもこれがあるだろう。「爾から出たものは爾に帰る」と。

諸君は知っているだろうか。ドイツの富はまた煙り(石灰の製造業)と水(水車の利用が非常に多く、粉を引く、板を切る、板を挽く等種々)によつて成り立っていることを。両氏とも敬服した。十時半就寝。

(●第百〇一日目)

七月一日 火曜日 快晴

七時起床。八時から十二時まで授業。昼食後一人でゾンスドルフという村の方へ散歩する。道は畑道で、馬鈴薯、小麦等の畑が遠くまで連なっている。小麦はまさに熟さんばかりに穂を垂れ道を覆っている。馬鈴薯は花盛りで、路傍には並木がある。わが向島の堤のように桜の木があり、桜の実は今が盛りで、あちこちで収穫をしていた。また道端には小さな小屋を作って取り立ての桜の実を売る老婆の姿も見える。野菜を作っている畑もある。また牧草を作っている畑では、雲が出てきたのを見ると、忙しく乾いた枯れ草を取り入れる者の姿も見えた。太った馬に山のように枯れ草を引かせ、家々に導く様、或いは畑の傍らで赤ん坊が籠の中で遊ぶ様は絵で見たのと少しも異なったところはない。

目新しいまま畑道をたどって、東南に行くこと四十分ばかりで一つの村に到着した。つまりゾンスドルフという村は、真の百姓村すなわち田舎なので、人々は皆畑に行つて、家には誰もいない寂しい有様で、児童は道で遊び、犬は留守を守つて昼寝をしている。家の戸締まりはせず、園に囲いもない。誠に気楽な様子である。三時頃帰宅。十時就寝。

(●第百〇二日目)

七月二日 水曜日 快晴、時に雲を起こして急雨あり

六時半起床。八時から十二時まで授業。夕食後散歩して薔薇の花を買い求め持ち帰ろうとする途中、子供が沢山集まってきた羨ましそうな顔をするので、一つ上げたたら大変喜んだ。十時就寝。ケムニツチ新聞に、横浜で英国人が皇太后の従騎から突かれたことが記してあった。

(●第百〇三日目)

七月三日 木曜日 晴雨不定

六時起床。七時から十二時まで授業。私は自分の誕生日にも気付かず、昼食に行つたとき、同じテーブルで食べる助教連から、私の祝日にと見事

な薔薇の花を贈られ、これが食卓に活けてあった。会う人毎に、「あなたに幸福に生活できますことを祈ります」「おめでとうございます」等の喜びの言葉を受けた。

これでは知らぬ顔をするのは良い心地もしないため、私が無事到着した喜びも兼ねて、誕生日のお祝いをすることを決め、宿の老婆に相談のうえ万端の手續きを行った。

この地では誕生日が人間第一番の祝日のようで、私が着いたときも「あなたの誕生日は何月何日ですか」と聞かれ、私は何の気もなく答えたことがあったが、友人や宿の主人等はよく覚えていて、宿でもすでに昨日から花の用意をしていたという。私の部屋は最も綺麗なところなので、この部屋で客をもてなすことに決めた。主人から種々の飾り物や人形の頭の蠟燭立て、花瓶等を沢山借りてきた。また主人秘蔵の皿（これは当国のマイセンという町で作ったもので、日本の九谷焼と同じような高価な品物という）等を出して、中央のテーブルに並べ、真ん中に贈られた花を飾った。蠟燭四本を点じ、七人分の菓子皿とコップを載せる皿を置く。花の脇には大きな（これも主人の自愛の）瓶を置き、白葡萄酒にイチゴの実を浮かべたものを満たす。他に小さな机二箇を部屋の隅に据え、一つにはランプと花や菓子、桜の実等を山のように盛る。またもう一つの机は煙草用で、葉巻煙草とその煙草の先を切る鉄箱等を置いた。また私の机の上には、花と日本から持ってきた冠鉄箱と綿画等を置く。

約束の時間、午後八時には皆が集まってきた。三カ所のランプと六カ所の蠟燭なので、頗る輝々として皆神聖な感じだと賞賛してくれた。

来客にはドクトルシミット氏、同ヒルトネル氏、同ホツタ氏（以上三名は助教）、ケルトネル氏（林務官補）、ステットネル氏（町の金満家）、クルーゲ氏（宿の主人）の六人で、最も親しい友人だけを集めた。私は主人公として、自ら酌を取つて献酬をする（礼式は昼の内に宿の主人から習つておいた）。皆々大いに喜んで、早くも一瓶を傾け尽くして、更に一瓶を用意した。

盛り上がったところで、私は皆の希望にあわせて「大学」のうち「物有

本末事有、終始より壹是れ皆以て修身為本」までを日本語風に読み上げ、続いてドイツ語でもって、修身齊家より治國家の順席を読み上げたところ、皆感心して聞いていた。

また、お客は私に次のような質問をした。ドイツの婦人と日本の婦人とどちらがよいかと。私はこのように答えた。

何を私に質問しているのだろうか。顔色の醜美をいうのか、風俗習慣の上下をいうのか、あるいは心性の良否をいうのか。顔色の美においては、東西各人種を異にしているので、印度人はその黒いことを尊として、その顔に墨をぬるように、各嗜好が異なるので、比較することはできない。したがって諸君の問いは必ずその下の二種にあるのだろう。これらについては、私としても大いに感じていた所があるが、それぞれ長短があるようである。しかし私はドイツに来てまだ日も浅いので今答えることはできない。数年後には十分な答えをすることができるだろう。

皆は黙ってしまった。全体的にこの地は女尊主義であり、女を自慢するのでこのように答えたのである。

それから種々の談話をしたあと、日本から持参した物や私が筆記したものを見せた。特に（不二道関係者）百十五名の行帳を見せたときには皆驚いたようである。私はドクトルシミット氏に言った。私はこれらの人々に対し、半銭の銭をも無益に使うことはできない。一秒の時間をも無益に経過させることはできない。しかし私はまた、この人々に対してその道のために行う事があるのなら、敢えてその労を厭わない。もし真に助けを必要とするものがあれば、私は私の衣服をもってこれを助けることを怠らないと。種々の談話が盛り上がり、十二時半になって一同が退散した。

私は、実に自己の位置を下すのを望まない。しかし謙讓を旨として、言語動作はなるべく礼を欠かないよう努めている。幸いに一人も不機嫌な者はなく、皆十分に酔って喜んで帰って行った。私は実に遠い他国において、実に愉快な誕生日の祝杯を上げた。わが自愛なる両親に向かって深く感謝をするものである。

#### （●第百〇四日目）

七月四日 金曜日

本日は大蔵大臣来校のため授業はなし。八時に起床。夕食後シミット、ヒルトネル両氏と近郊を散歩し、植物を採集する。この日は昨日贈られた花が部屋に満ちていたので、香気が芬々と漂っていた。十一時就寝。

この日学校が大蔵大臣に、私の日本服の写真を見せたところ、喜んで持ち帰ったということである。

#### （●第百〇五日目）

七月五日 土曜日

七時起床。朝の間非常によい天気だったので、近郊の散歩を思い立ち、夏服を着てザクセン国全図と竹杖一本を携えて、飄然とターラントを發つた。時に八時十五分。今日は教師達は各自仕事があつて同行しないので、かえって気ままに足を運ばせることができた。

道をドレスデン街道に取り、行々歌いながら山野の景色を眺め、九時少し前にハインスベルクという村に到着した。あたかもこれは日本の中仙道の浦和を發して東京へ向かい、蕨の宿に着いたという感じである。行々地図を見ながら方角を正し、道端の人に土地の模様などを聞きながら、九時十五分にはドクヘンという宿に到着した。わが中仙道の板橋か。それにしては家屋も石造りで、製造所の高大な物が非常に多い。ここは向井氏と一回来たことのある有名な石炭山のある所で、見渡す麦畑の下は大抵石炭の旧鉱だという。しかし簡単に道が抜け落ちたという話もないので、道の下も洞穴と知りながら安心して気楽にぶらぶら見物することができる。

ここにはまた大きな煉鉄場があるが、鉄の鉱山がある訳ではない。ただ石炭があるために、既に酸化した鉄レールの古物等を集めて製造し直しているということである。買いたい思いを起こさせる市中に陳列してある小刀の類は、この製造所で作られたものという。

その他にもここは鉄の機械が実に多いところである。例えば路傍の垣根のようなものも鉄で出来ており、一寸学理を応用して面白く作っている。

いわゆる鉄を利用したもので、杭も同じ様である。

また広大な硝子製造所、蒸気機関製造所、瓦斯製造所などがある。また蒸気力の鋸機械があつて、伐木を挽き割り、同製造所内で家屋を切り組んでいる様子は大変便利である。この辺には鋸機械が非常に多く、絶つて日本風の木挽人などというものはない。しかしこの国でも昔は、日本と同じく人が手でもって腰を曲げて木を挽いていたことは、宿の主人が私が持参した木挽の図を見て話してくれた。

さてその鋸機械は大抵は水力で、この所の下には只で掘れる石炭があるので、蒸気力を用いているという。こうして伊豆天城山の伐木場に、昨年五月用いられるたのは蒸気力で、ただ一箇の輪形鋸を用い、大変な危険と不利益の多いことを実験したが、今、この地の物を見ると天地の差で、日本のような物は、この地ではすでに昔語りする古器に属すものである。すなわちこの地では、長形の鋸を並列にして、一度に数枚の板を何枚でも木の大きさに合わせて取れるので早く、かつただ一箇の鋸を用いるのと違って、鋸の上下に動く割合が遅いので、人夫が怪我をすることが少ない。この工場は一、二人の人夫で、それも木を据え付けた後は遊びに出掛けて、その木が板になる頃帰ってくる。大変気楽な有様である。

ターラントにも二箇所の大きな水力鋸工場があるので、詳しく図に記して、鋸付けの方法、費用、人夫、利益、鋸の購入の手続、その他一切を調べてみるつもりである。なぜならば、日本は凸起した脊椎を有する地形の国で、かつ日本の山林は皆多少傾斜の地にあつて、水力を利用するのに最も適している。鋸機械のようなものは、第一にこの点に用いられるべき物であることを深く信じるからである。

天城では木が安いためか、川の端でも水力を用いず火力である。水は何時までも利用することができるが、木はその近所に無くなれば、段々高価になってくるものである。起業者はもっと多くのことを考えなければいけない。

しかも日本において製造所といえば、多くは火力を用い(何でもかでも石炭)、大きな家を作らなければ事業ではないような浮気の流行熱(若し

あれば)は早く冷やして、着実確固たる事業の起らんことを望んで止まなものである。

この地の製造所等は、資本と生産力の大きな割にはみそぼらしいこと甚だしい。「私の病気でついつい堅苦しいことを記してしまつたが、この日誌は学問上の理屈は本旨でないので、止めて元の気楽な俗人になりましよう」

十時になつたので、学校の子供達が大量帰つてきた。私に付いて来て、支那人という話し声が聞こえたので、私は言った。「支那人ではない。日本人である。日本はこのドイツ全国に近い四千万の人口を有する東洋の大帝国である。いやしくも学校に通うものが知らないとは。明日学校へ行つて教師に聞いて、私の言つたことを確かめなさい」と。

道で、小さな手車の上に三、四の籠を積んだ回りに、井戸端会議のように大勢の人が集まっているのを見て何かと思ひ、傍聴、否見物したところ、これは日本の八百屋と同じで、きゅうりに桜の実、苺の実、菜、馬鈴薯、人参等を売っていた。

十時四十分にはブラウインという村の森屋という家で、一杯のビールを傾け、宿の主人に日本の話をして、それから十一時半頃にドレスデンに到着した。王城の方から市中を見物して、昼食をとり、町の東南の方にある動物園に行つて見物する。四時十五分の汽車で五時にターラントへ帰る。都合が良かったのは、私が汽車に乗ると同時に急に雨が降り出したことで、その他にもたくさん書きたいことはあるが、紙に限りがあるのでここで筆を置く。

(●第百〇六日目)

七月六日 日曜日 曇天

休日なのと、昨日の長散歩のため、非常に疲れていたもので、九時まで寝ていた。九時から起き出して第十一報を出し、ヒルトネル氏の所へ行って押し葉を見る。終日勉強して、夕食後シミット氏と前山を散歩する。十一時就寝。

(●第百〇七日目)

七月七日 月曜日 曇天

六時十分起床。七時から十二時まで授業。午後四時から設制学の実地演習のため山林へ行き、七時に帰る。夕食後、ヒルトネル氏と散歩する。この日フライベルクの向井氏から手紙が来る。手紙には、フライベルクの学校は、本月二十六日頃から暑中休暇になるので、慰労のため日本食を作りたい。都合の良い日を知らせてほしい、というものである。返事を出して十一時に就寝。

(●第百〇八日目)

七月八日 火曜日 曇天

六時起床。七時から十二時まで授業。ベルリンの勝島氏から手紙が来る。来週、来訪したいとのことなので、返事を出して案内した。また向井氏に書面を出す。昼食後、小散歩をする。夕食後、シミット、ステットネル両氏と散歩をし、ビールを飲んで帰る。十時頃寝に就く。この散歩の際、校長夫婦に途中で出会った。種々の話の中で、あなたは初めて来た時よりも大部太って、大層立派になった。あなたの両親がさぞ喜ぶだろうから、写真を撮って日本に送ったらいいだろうといわれた。このため近日中に写真を撮る考えである。

(●第百〇九日目)

七月九日 水曜日 曇天

六時起床。七時から十二時、三時から四時まで授業。四時から近所を散歩したところ、この村の老夫婦や他に散歩する人に出会い、一緒に散歩をすることを請われた。一緒にゾンスドルフの方へ散歩し、ある店で休みながらビールを飲み、それからコスマレスドルフという村へ行き、夕食をして帰った。時に八時であった。およそ一里ばかりの所であったが、話しながら歩いていたため、大変時間を要した。

この人達は、あちこちの知人に対して、遠来の客と一緒に歩いては自慢そうに紹介するので、おかしかった。私の手帳にドイツ語の文法が日本語で書いてあったので、茶店の主人をはじめ皆に見せた。丁寧に取り扱ってくれた。疲れていたもので、九時に寝る。帰宅時に近所の者から、踏舞があるから一緒に行かないかと誘われたが辞退した。

(●第百十日目)

七月十日 木曜日 曇天

六時半起床。七時から十二時、三時から四時まで授業。この朝、向井氏から手紙が来る。来週ドレスデンに行くので同行しないか、という申出だったが、私はこの前の土曜に行ったし、また今度の土曜、つまり明後日は動物学の教員とドレスデンの動物園見学に行く約束があったので、辞退する旨返事を出した。

この日午後四時、体重を計ったところ、五十六・二五キログラム。即ち十五貫二百二十八匁で、先月六月十日より二五〇グラム、即ち六十九匁増え、五月十日よりは、三百三十五匁の体重を増した。ただし衣服、靴などは常に同一の物を使用している。

(●第百十一日目)

七月十一日 金曜日 快晴

六時半起床。十二時まで授業。昼食の時に猿の見世物が来る。これは日

本の罪人を輸送する馬車のように、鉄の網で大きな箱を作り、これを馬車に載せ、一人は音楽を奏じ、一人は見物人から錢を貰う。十疋ばかりの猿と三疋の熊がおり、それぞれ音楽に合わせて飛び跳ねる様は大面白。錢を貰う人は、料理屋の中に入って来て、麦わら帽子を逆さまに出して錢を乞う。このようなものは日本にはないだろう。余り関心しない風俗である。私も人並みに五ベンニツヒ（一錢五厘ばかり）を投げてやった。五ベンニツヒでは、ありがたし、という声も小さい。この地では、五ベンニツヒはおよそ日本東京の五厘に相当する。もしくは三厘位である。

この地の習慣では、食事の度毎に給仕に多少の錢を与えるのを習慣とし、大抵は一回につき、五ベンニツヒから十ベンニツヒで、ベルリンでは私は十ベンニツヒを与え、ターラントでは大抵五ベンニツヒ、時としては十ベンニツヒを与える時もある。五ベンニツヒ以下の錢はほとんど使い道がないくらいで、日本の十文錢のようなものである。

夕食前、小散歩をして桜の実を小屋で買ひ求めて帰る。今が最盛期で味も良いときである。

今日思い起こしたが、今日は日本農林学校の暑中休暇になる日である。わが故郷の学友はつつがなくいるだろうか。各業を閉じて、或いは帰省して親を省み、或いは避暑地へ出掛けているだろうか。私は学友のよしみから、また国家の爲にも、わが故国の教授並びに学友諸君が無異にこの暑を凌がれ、親涼燈火親しむ頃より、再びその業に勉勵されることを、速く海外にありて祈念するものである。

(●第百十二日目)

七月十二日 土曜日 曇天

七時半起床。フロフェサーニツチセー氏及び学生三十名許りと、ドレスデンの動物園へ動物学実地研究のため旅行する。八時二十五分ターラント発の汽車で出発する。この地の学生は、教授と左程の隔たりなく、教授も学生も中等汽車に同車する。私も中等往復切符で教授と同車した。ただ一二の貧しい学生は三等〔下等〕であった。

私は学術上に必要な経費の他、無益な出費をしようとは思わない。しかし、自己の地位を保つため、一つは日本の名譽の爲にも、中等以上の学生と同等、若しくは同等以上の生活をするようにしているので、常に他の学生の切符を買う様子を見て考えて買うことにしている。

当国の汽車は、フランスの上等がこの地の中等と匹敵する位で、中等でも日本の上等汽車くらい立派である。

九時頃にドレスデンに到着。それから徒歩で半里ほど歩いて動物園に至る。園長の案内で、人夫に命じて昼寝をしている熊を起し、小屋に隠れている鹿を追い出し、獅子を怒らせ、虎を笑わせ、象に挨拶させ、鳥を鳴かすなど、努めて我々の学術研究に、否、むしろ見物遊山に便宜を与えてくれたので、前に一人でくたびれ足を引き摺りながら見たときは大違いであった。

しかも博学な教授の説明のため大変参考になった、というよりむしろ面白かった。日本の代表は鶏とサンシヨウ魚である。さすがに懐郷の情を起かさせる。

午後一時には見学も終り、園内の茶屋でビールを飲み、各学生は分かれ分かれとなった。私は教授並びに四五の学生と園の外から鉄道馬車に乗り、王城の方へ行き昼食をとった。その後市内を散歩して、四時十五分の汽車で五時にターラントに帰ってきた。

動物園はベルリン、パリの園よりも小さいが、日本の上野公園の三四倍はあり、博物館には大きな池等もあった。王城は王城と書かれてあるので、僅かに識別できる位で、粗末で別に構え等はなく、町屋と並列しており、家屋も古く余り大きくない。国王が外出するときも、日本の外務大臣の馬車より粗末で、日本のように巡査が通行人を制するなどのことは決してない。また従者も別にいない。これはベルリンの皇帝が外出するときにも、私が実際見た時でも、兵隊等は通常随行することはない。

これに反して、動物園の方に沿って富豪の家が並んでいてところは、大変立派で、それぞれ綺麗な園を有して、二頭立の馬車が常に各家に入入りする様子は実に羨ましい限りである。

動物園で一群の女生徒に出会う。これは女子職業学校の生徒で、皆手一つ一つの籠又はザルをさげている。多分針道具か編み物道具が入っているのだろう。貧乏人と見えて、余り立派な衣服ではなく、随分見苦しいものが多い。

私は鶏とサンショウ魚の他に、もう一つ日本（もしくは支那）の動物として見物される役目であったが、今日は大勢の学生なので、その役目を免れた。しかし賞賛すべき点は、この地の人は、日本人が西洋人に対して行うように、後に付いて来たり、前に立つなどして直接見るものではなく、内緒に見ること。つまり遠方、または私が気の付かない所から見ているのである。もしも私が見ると、大いに恥じて直ちに立ち去るのである。私が当国に着たときは、皆々美しい衣服を着て、また美人のみのように思われたが、それは全く目新しかったからで、今では種々の汚点が見えて美人などは一人もいなくなってしまった。

殊にドイツの婦人が、脊に三寸ほど高くしわを寄せて、道の悪いところで肘を折るところは誠に見苦しい。その様に衣服が大切ならば、何故左様に長く作るのか。全く理解できないところである。菌が汚いこと。衣服の裾が馬糞の中を引き摺ること。「おてんば」なこと。多くの婦人は常に籠を携えていること。往来でパンを別けてかじり、「男はもちろん」ビールを飲むこと。内緒で煙草を飲むこと。襟元に金をつけていること。働いているふりをする。常に金のある男を探して結婚しようとする。その心は大変けちであり、高尚な志望が無いことなど。

右は一般の女について言えることで、先頃ドイツの新聞に日本の「アラ」をいわれた仇討ちである。しかし良い点は、良く働いて金をためるため、国家経済上に利益があることである。しかし友とすべき値打ちはない。管見（狭い知識）によれば、ドイツでは婦人よりも男子の方が余程大様で、その心も美しく、価値がある。なお、私の目に進むに従って、触れるところの現況は、この日誌に載せるのを怠らなかつた。

夜、シミット、ヒルトネル両氏と共に、主人クルゲの部屋に話に行つて、ビールを馳走になる。十時就寝。

この日、教授ニツチセー氏は、日本の干柿をドレスデンから買つて来て、植物の教授ヒルトネル氏に尋ねた。ヒルトネル氏は、見たことがなく分かつたので、私が直ちにラテン語をもつて答えたところ、大いに賞賛を得、内心嬉しかった。これについては、日本の教授諸君に向かつて教育の恩を感謝するものである。

#### （●第百十三日目）

七月十三日 日曜日 快晴

午前七時起床。八時から十時まで教会へ行く。午後一時からシミット、ヒルトネル他二名と三里程ある所に散歩する。途中桜の実を買つて食べながら、景色の良い道を歩く。

コスマンドルフという村からエルナウン村に至り、一亭でコーヒーと菓子を食べる。この辺はターラントから東方二里ばかりの村落で、料理屋と書いてあつても、日本のまな板のような机で、古びた椅子は腐っている。床は傾いて、流しの水は入口から往来に流れ出している。臭気が漂う有様、田舎の生活はどこでも同じである。

秋の夕暮れともいふべきか、半時間も待つてコーヒーと菓子は出てきたが、余りにも醜いので食べる気にもなれなかつた。

しかし、往来のあちこちで、桜の木の下に小屋を作つて、桜の実を売っているのは新鮮で味も良い。今日は日曜なので、この家にも多くの人が入っているが、おそらく普段は客などは無く、家鴨の昼寝場となっているのだろう。この村の回りは山林もなく、ただ麦や牧草、馬鈴薯の畑がある丘のような所で、小さな泥池には家鴨が可愛そうに泥水を飲んでゐる。

この辺はあまり裕福な所ではないようである。しかしこの国の習慣として、日曜には必ず遊ぶため、この料理屋の前の牧場では、鳥を射る真似をして遊んでいるものがある。我々にもやってみるかと思つた。これは幾らか射料を出すものである。その遊び方は、日本の弓を鉄砲の筒に結び付けたようなもので、引き金で矢を外すようになってゐる。大人がこのような遊びをすることは誠に馬鹿げて見える。



ここから一里ばかり田舎道を経て、ポイゼハワルトという村に至る。ここにはゴルトネースという有名な丘がある。この辺りでも最も高いところで、丘の上には一つの料理屋がある。日曜日、しかも快晴ということもあって、大勢の人が集まっていた。一杯のビールを傾け、眺望台に上る。台は家屋の上であり、上るには五ベンニツヒを払うようになっていて、この台からは、ドレスデンからイルベ川、その他のザクセン国の大部分が見え、大変眺めが素晴らしい。

ちようどこの時、この村に一つの婚礼があった。新夫婦は多くの花を持った人々に送られて、この料理屋に来て舞踏をした。新婦は黒い衣服に白い布を頭から被り、新郎と共に踊り客人もまた盛んに踊る。なかなか盛大である。

それから方向を変えて、一里余りあるウイルムスドーフ村からラベナウグレントに至って夕食をとる。九時四十五分の狭鉄道でコスマンドルフ村に至り、それから徒歩で十時に帰り、直ちに寝る。

ラベナウグレントまでは、私は全く初めての道で、しかも田舎道で景色の良いところが多く、田舎の生活の様子も見学できて大いに面白かった。ウイルムスドーフ村という所、つまりラベナウグレントから半里余りも先の畑の中であるが、八時十分に太陽は没し、草は露を結び、野兎のみ道に遊び、心身共に涼しく寂しくなるが、月夜のため道は明るく、しかも大勢なので馬鹿話をしながら野道をたどった。

(●第百十四日目)

七月十四日 月曜日 快晴

午前六時半起床。七時から十二時まで授業。午後五時頃、向井氏がドレスデンからの帰り道と行って訪ねて来た。共に夕食をする。同氏は八時五分の汽車で帰るため、ステーションまで見送った。夜、宿の老婆が話に来る。薔薇の花を持って来てくれた。十時就寝。

(●第百十五日目)

七月十五日 火曜日 快晴

午前六時半起床。七時から十二時まで授業。気候もようやく暑くなってきた。昼食後、ナイフ磨き屋が来たのでナイフを研がせる。砥石は車輪に仕掛け足でこれを回す。ナイフは動かさないうで逆に砥石が動いて磨けるので、大変早くかつ便利である。日本でも磨き屋は試みてはどうだろうか。ただし、これではナイフの磨減する量が多いので、荒起しだけで、仕上げは他の日本と同様の砥石で行う。

午後七時からドクトルシミット氏、ステットネル氏、ドクトル某氏らと共に、一里程先のエノデハクロネーという所に散歩し、同所で夕食をとる。十時発の汽車で十時半帰宅、直ちに寝に就く。

同所は山中にただ二三戸の料理屋のみある山家だが、暑中は人が多く散歩に来る所で、景色が大変良いところである。

(●第百十六日目)

七月十六日 水曜日 快晴 最高温度八十二度(摂氏二十七・七度)

午前六時二十分起床。七時から十二時まで授業。昼食後、ヒルトネル氏の部屋で押し葉を分ける。今日はこの頃にないくらいの暑さで、初めて暑中になったような思いがした。しかし私の部屋は風通りもよく、窓の前には木があり日光を遮るので凌ぎやすい。

夕食後シミット氏と散歩する。この日は温泉屋で音楽と踏舞があるので、多くの人が来て賑やかであった。十時就寝。

(●第百十七日目)

七月十七日 木曜日 快晴 最高温度八十二度(摂氏二十七・七度)

午前六時半起床。七時から十二時まで授業。夕食後、シミット氏と近郊に散歩する。十時就寝。

(●第百十八日目)

七月十八日 金曜日 快晴 最高温度八十四度(摂氏二十八・八度)

午前六時二十分起床。七時から十二時まで、午後三時から五時まで授業。午後二時頃降電がある。電の粒は団子大位であった。それから夕立となったので、夕刻は大変涼しくなった。五時から髪を切りに行く。

当地の学生の修業費を聞くと、平均月に百マルクで、衣服まで自分で作る者は平均百二十マルク位という。ただし月謝はこの他であるという。こうして最も貧乏な者は、月に八十マルクで暮らしている者もいるという。また二百マルク以上親から貰っている者も極わずかいるという。しかし、私の考えでは、このように毎日沢山のビールを飲んで、よくそれで足りるものだと思う。もつとも衣服や食事は悪いものを用いて、皆ビールを飲んでしまうのである。

(●第百十九日目)

七月十九日 土曜日 曇天

午前六時起床。実地演習のため、校長、教授並びに三十名程の学生と往復切符で、四里程離れたチツベルワルトストルフ村という所の官林を巡回する。午後二時に終わって、ステーションの茶屋で校長と共にビールを飲み、六時頃帰宅。九時就寝。

(●第百二十日目)

七月二十日 日曜日 曇天

予てからの約束により、動物学教授ニッチエ氏、三番の教員及びドクトルシミット氏と写真機械二箇を携えて、当所から西方の村落に散歩に出掛け、それぞれ景色のよい所で写真数枚を撮ってもらう。次の機会に日本へ送る考えである。

ランドベルリケ村で昼食をとり、ツラセンハウスで昼食。ホースブリック村(ちようど八里ばかりの田舎道)から、帰路フライベルグを通じて、汽車で午後九時ターラントに帰る。今日見てきた所は次回に説明しよう。

(●第百二十一日目)

七月二十一日 月曜日 快晴

午前七時起床。八時から十二時まで授業。ドレスデンから勝島氏の電報が来る。汽車で迎えに行つたが、宿所が分からなかつたので帰宅した。

これは勝島氏が宿所を書き忘れたためで、私は多分ステーションで待つているものと思つて行つたが、勝島氏は気が付かず宿で待っていた、ということが後で分かつた。

(●第百二十二日目)

七月二十二日 火曜日 曇天

七時から十二時まで授業。午後七時に勝島氏が来て二泊する。

(●第百二十三日目)

七月二十三日 水曜日 曇天

勝島氏を案内して、近所の植物園などを見学させ、午後から学校を見せる。また、シミット氏が私と勝島氏との写真を撮ってくれる。七時から温泉屋へ行き、音楽を聞き踏舞を見て帰る。

(●第百二十四日目)

七月二十四日 木曜日 快晴

午前、勝島氏と共に入浴。十二時の汽車でドレスデンまで見送る。勝島氏はなお速くまで行くので、私は一人ドレスデンを見物して七時頃帰宅する。久し振りで、昨二十三日、六月七日出の父上からの第三報、銚子からの書状、並びに不二道の行帳が来る。印度回りと見えて、到着まで四十六日を要している。行帳は実に感激に堪えないところである。

(●第百二十五日目)

七月二十五日 金曜日 快晴

六時起床。七時から十二時まで、三時から五時まで授業。向井氏から、